

国士舘大学審査学位論文

「博士学位請求論文の内容の要旨及び審査結果の要旨」

「本居宣長を通しての日本政治文化研究

－和魂漢才と日本の心－」

イルマ・サウインドラ・ヤンティ

Ilma Sawindra Janti

氏 名 イルマ サウィンドラ ヤンティ
学位の種類 博士(政治学)
報告番号 甲 第38号
学位授与年月日 平成28年3月20日
学位授与の要件 学位規則第4条第1項該当
学位論文題目 本居宣長を通しての日本政治文化研究
—和魂漢才と日本の心—
論文審査委員 (主査) 教授 的射場 敬一
(副査) 教授 藤森 馨
(副査) 教授 藤本 吉蔵

博士論文要旨

本居宣長を通しての日本政治文化研究

—和魂漢才と日本の心—

イルマ・サウィンドラ・ヤンティ

Ilma Sawindra Janti

江戸中期に活躍した国学思想家である本居宣長(1730年—1801年)というフィルターを通して日本政治文化について研究するというのが、本論文の主題である。問題意識としてずっと念頭にあったのは、「なぜ日本は幕末明治維新の変動期を上手に乗り越えることができたのか」ということである。幕末の1860年代から諸列強のアジア・アフリカ進出が始まる。帝国主義時代である。1870年初頭にはアジア・アフリカの国々で植民地になっていたのは、20%程度であったのに、1890年代になると90%も植民地になるのである。19世紀の終わりは、アジア・アフリカ諸国にとっては、まさしく危機の時代であった。アジア・アフリカのほとんどの国が植民地となるなかで、わずかな例外が日本であった。なぜ日本だけがということの謎解きの意味もあって、本居宣長を通して日本の政治文化の特質を明らかにしたいというのが、この博士論文の主題である。

本論文は3部構成からなっている。第1部は、「宣長の古代」というタイトルで、宣長が、生涯をかけて『古事記伝』を書き上げたのだが、その意味するところを日本の古代史と『古事記』の「天の岩戸」と「天孫降臨」を読み解くことで明らかにしようとした。

第1章では、まずなぜ宣長が『古事記』(710年)と『日本書紀』(712年)の二つあるなかで『古事記』を選んだのかの理由を解明する作業を行った。宣長にとって「なぜ『古事記』なのか」を明らかにする作業を行ったが、その決定的な理由は、使われている文字である。『日本書紀』は漢文で書かれている。そのため、古来尊重されてきた。その理由は、そもそも中国から学問が伝わり、漢籍の学問が盛んになったからである。宣長が生きている江戸時代になると『古事記』の名前でさえ知らない人もいたほどだという。なぜか、『古事記』は漢字の音読みや訓読みを交えた和文で、神話から始まり天皇を中心にした古代史が書かれている。その内容は素朴で、正しい日本の歴史書の体をなしていないのではないかと考えられてきたからである。

宣長によれば、物事と物事の意味とそれを表現する言葉とは、相即するものである。「名は体を表す」の例えの

ように、名前は事物を表し、その事物の意味をも表すものである。ところが『日本書紀』は、中国文化圏で通用するように、漢文で書いてある。漢文というのは、中国の言語である。日本の事柄を中国の漢文を利用して書いたならば、当然のことながら、必ず中国の習慣にも影響されるものである。つまり『日本書紀』が漢文で書かれているということは、漢文の文章美に支配される。そうすると、日本の古の言葉の美しさが失われてしまうものである。これに対して『古事記』は、和文で書いてあるので、どんなに素朴に見えようとも、本当の日本の姿を見せているのである。『古事記』には古の言葉のままに記されているのであり、上代の言葉の美しさがよく伝えられているだけでなく、上代の様子もそのまま伝えられているのである。だからこそ宣長は、古の道を探求するためには、『日本書紀』ではなくて、『古事記』でなければならなかったのであろう。

第2章では、『古事記』と『日本書紀』がどういう時代背景から出てきたのかを明らかにする作業を行った。対外的危機を背景に聖徳太子(574年-622年)から始まった日本の古代国家建設の歩みは、壬申の乱(672年)に勝利することで政権を握った天武天皇(631年-686年)の統治で一応の完成をみた。古代天皇制国家を形成するには、伝統的な神道ではなくて、儒教や仏教が必要とされた。儒教と仏教は、まさに文明であった。遣隋使や遣唐使によって中国文明を貪欲に摂取して、国家統一を成し遂げ国家秩序を必死に整えることで、古代日本は、中国の属国となることなく独立を維持できたのである。

『古事記』『日本書紀』編纂の背景というのは、まさに宣長の古代を見つけ出す旅であった。それゆえに、皇室の正当性あるいは正統性を担保するためには、天孫降臨の神話と神道が必要とされたのであろう。その道具立てとして『古事記』と『日本書紀』があり、天照大御神から続く万世一系の天皇制を担保するものとしての伊勢神宮の創建があったのではないだろうか。これが、第3章で分析していることである。

隋帝国の出現でにわかにな臭くなった東アジア世界において、古代日本は、その独立を担保するために貪欲に中国文明を学び、国家統一を成し遂げた。聖徳太子から天智天皇(626年-672年)、そして天武天皇へと継承されてゆく、なりふり構わず中国の制度を採り入れての律令体制として国家を整備し、全国を統一する姿は、どこか諸列強のアジア・アフリカ世界への侵出の中で欧米文明を貪欲に採り入れ、「富国強兵」のスローガンを掲げて独立を維持した明治日本を彷彿とさせるものである。にもかかわらず日本人は、日本の心、宣長の表現を使えば「大和魂」を失わなかった。日本の心を保存し生かし続けるためにこそ、天武天皇は『古事記』と『日本書紀』の編纂を命じ、そして、その日本の心の故郷として伊勢神宮を建立したのではないだろうか。よって、中国の衝撃の中で帝国の文明を吸収しながらもその独自性を保持した日本の姿は、まさに「和魂漢才」である。「和魂漢才」という言葉は、平安時代にはもう既に使われていたそうである。幕末明治維新で西洋文明を取り入れながらも日本の独自性を保とうとして日本に対して、佐久間象山(1811年-1864年)が「和魂洋才」と述べ、それが明治初期に使われるようになった事情も、この日本の政治文化の特質を如実に示すものであろう。

第2部では、本居宣長が生まれた時代背景、そして生涯を追いかけた。本居宣長がその生涯を過ごした松坂は、楽市楽座による経済の振興のためのまちづくりを織田信長(1534年-1582年)に学び、それを継承した豊臣秀吉(1537年-1598年)の家臣となった蒲生氏郷(1556年-1588年)によって、まさに計画的な商業都市として造られたものである。城下町を商人の町として形成するために、自分の生まれの近江から商人を計画的に移住させ、町を栄えさせた。都市の道路を整備するだけでなく参宮街道を引き込み、また川に橋を渡して交通の便をはかるなどの社会的なインフラの整備も精力的に行った。松坂は伊勢神宮に参拝する人たちにとって宿場町としても発展した。日本三大商人の一つ伊勢商人の代表的な存在がここ松坂の商人たちなのである。その松坂について分析紹介しているのが、第4章である。

次の第5章では、本居宣長の文化的社会的背景を書いた。京都の遊学は5年半ぐらいであったが、宣長にとっては非常に大事な時期である。そもそも上京の目的は医学を学ぶためであったのだが、京都では、掘景山、契沖、

武川幸順などとの出会いのほかに、様々な経験をしている。宣長が京都に遊学に行った時、元禄時代が終焉してからすでに48年間たっていたが、京都は元禄文化の中心でもあったので、その残り香があり、宣長は京都での生活を享受したのである。

宣長の生涯についてもこの章で書いた。宣長は町人で、医者である。宣長は松坂の商家の出であるが、商いに向いてなく、読書ばかりやっていた。宣長の母が、宣長が経済的に自立していけるように、医学を学ばせるために京都へ赴かせた。若いときからまじめで、読書が好きな宣長も様々なノート、日記、和歌などを書いている。早熟な天才ぶりが印象的である。

第3部は本居宣長の「物のあわれ」論を中心に、それがどうして政治思想にまでなるのかについて論じた。宣長には、大きく分けて2つの柱があって、一つは、すでに第一部で論じた『古事記』の注釈である。『古事記』の注釈の作業は、生涯続けられ、最晩年によく『古事記伝』としてまとめられ出版されている。もうひとつが、平安時代の女流文学である『源氏物語』の研究と『古今和歌集』などの歌論の研究である。第6章では、本居宣長の有名な「物のあわれ」論について考察している。平安時代の国風文化の世界を紹介しながら、宣長の「物のあわれ」について迫っている。東北大学の大学院時代に著名な宣長学者と言われた相良亨と田原嗣郎の研究を先行研究としながら、「物のあわれ」が意味する世界に肉薄しようとした。

最後の第7章に「やわらかな主体の誕生」と題したのは、宣長の国学が、その分析対象が平安時代の女流文学であったことも相俟って、江戸の武家社会の雄々しくも猛々しい人格類型とは違う、ある意味女性的でやさしくやわらかな主体が生み出されている、そして、それこそが日本人の原型だと述べていると解釈したことからである。

本居宣長以来の国学は、江戸時代には儒学に比するとあまり重視される学問ではなかった。宣長がそうであるように、いわば町人の学問として、伏流水のように江戸社会の水面下で流れ続けていたのである。幕末の激動期になると、国学は幕藩体制に代わる尊王思想を提供した。国学は、幕末の草莽の志士たちに対して尊王攘夷運動の思想を提供したのである。幕末明治維新の国内的危機、諸列強による植民地化の危機を、日本は欧米諸国の文明を貪欲に取り入れながらも、その独自性を失わず、なおかつ諸列強に伍していけるだけの主体性を発揮できた。その主体性を発揮するのに与って力があつたのは、まさに宣長以来の国学政治思想の働きにあるのではないかとことである。さらに明治日本が、近代化を推し進めるのに、他のアジア諸国と比べて容易に西洋の学問を受容できたのは、まさに、この国学が、江戸幕藩体制を支えていたイデオロギーである儒学と相戦い、そして、その後の国学の衰退が象徴しているように、儒学と国学が刺し違えたことであつたからではないか。洋学は、儒学と国学が刺し違えた、それゆえ、焼き払われた畑（焼き畑）に繁栄したのでないだろうか。そういう立場からみるならば、幕末明治維新の日本の大変革において、そして、洋学を受け入れての急速な近代化に対して、本居宣長の国学の果たした役割は小さくなつたのではないかと思う。

日本の政治文化の特質を「和魂漢才」という言葉で要約したが、地震大国日本の地震対策を事例に整理しておきたい。日本は地震大国であるにもかかわらず、高層建築が多い。その典型がアジアで一番の高さを誇る東京スカイツリーである。地震による倒壊から建造物を守る方法は大きく分けて三つある。一つは、建物自体を頑丈にする「耐震構造」、もう一つは、建物と地盤とを切り離して揺れが建物に伝わらないようにする「免震構造」、そして、特殊な装置や構造上の工夫により建物に伝わる揺れを小さくする「制震構造」である。東京スカイツリーには、最後の「制震構造」が採用されている¹。

本居宣長が日本文化に発見した「あはれ」や「女々しさ」や「やわらかさ」は、いわば日本社会が対外的な危機に対処するために身につけた「制震構造」のようなものである。日本が独自の文化と政治的独立を維持することが可能だつ

¹ 瀧井宏臣『東京スカイツリーの秘密 世の中への扉』（講談社、2012年）参照。

たのは、頑丈な「耐震構造」の国と文化を作ることによってではなく、あるいは他国と隔絶するという「免震構造」によってでもなく、まさに「制震構造」の政治文化によってではないかということである。すなわち、外国文明の刺激を受けつつも、その衝撃によって倒れることなく、その衝撃を上手に取り入れ、と同時に伝統文化も保存することができる政治文化だったからではないかということである。「和魂漢才」や、明治時代に叫ばれた「和魂洋才」という言葉は、日本が「制震構造」の社会であるということを巧みに言い表しているのではないだろうか。日本は、その独特な「やわらかさ」によって、古代においては隋や唐などの大帝国の影響下に置かれても、また近代においては西洋帝国主義諸国のアジア侵略にさらされても、そうした強大な文明を貪欲に吸収し、古代では律令制に基づく中央集権化を完成させたように、また明治期には近代化を推し進めたように、国の形を維持したままアップグレードしていくことが可能であったのではないか、これが本論における私の結論である。

氏 名 イルマ サウィンドラ ヤンティ
学位の種類 博士(政治学)
報告番号 甲 第38号
学位授与年月日 平成28年3月20日
学位授与の要件 学位規則第4条第1項該当
学位論文題目 本居宣長を通しての日本政治文化研究
—和魂漢才と日本の心—
論文審査委員 (主査) 教授 的射場 敬一
(副査) 教授 藤森 馨
(副査) 教授 藤本 吉蔵

博士論文審査結果の要旨

政治学研究科政治学専攻

氏名：イルマ・サウィンドラ・ヤンティ
(Ilma Sawindra Janti)

論文タイトル

本居宣長を通しての日本の政治文化研究

—和魂漢才と日本の心—

イルマさんの研究は、本居宣長というフィルターを通して日本の政治文化の特質を明らかにするというものであり、その特質は何かというと、その副題につけてある「和魂漢才と日本の心」という言葉に集約できるのではないかということである。日本の心というのは、本居宣長の表現に従えば大和魂である。イルマさんの研究の出発は、アジア・アフリカ世界の中で例外的に諸列強の植民地にならず独立を保ったのみならず、経済的に卓越している日本の秘密をその政治文化の中に探りたいということである。

序論で言及しているように、彼女は、日本の政治文化の特質を明らかにしたいと願い、そこで20代で東北大学の大学院に進んだが、先生の勧めで宣長の研究に入った。日本文化を学びたいのなら宣長を研究しなさいという、インドネシア国立大学に客員教授してこられていた楠教授のアドバイスに従っての道であったが、それがかくも困難で険しき道だとは知るよしもなかったという。宣長には、大きく分けて2つの柱があって、一つは平安時代の女流文学である『源氏物語』の研究と『古今和歌集』などの歌論の研究である。もう一つは、『古事記』の注釈である。『古事記』の注釈の作業は、生涯続けられ、最晩年によく『古事記伝』としてまとめられ出版されている。この二つの研究を通じて、宣長は「古の道」を探っている。

全体の構成を明らかにするために、論文の目次を紹介する。

序論

第1部 宣長の古代

第1章 『古事記』と出会う

- 第1項 本居宣長と『古事記』
- 第2項 「道」を学ぶ
- 第3項 『古事記』と『日本書紀』の比較
- 第4項 なぜ『古事記』なのか

第2章 『古事記』・『日本書紀』編纂の歴史的背景

—古代天皇制国家の形成—

- 第1節 氏姓制度と豪族の争い
- 第2節 隋の建国と聖徳太子の政治
- 第3節 遣隋使と遣唐使
- 第4節 大化の改新と改新の詔、壬申の乱
- 第5節 「京」の形成と文化
- 第6節 天武天皇の政治と『古事記』・『日本書紀』の編纂

第3章 『古事記』と伊勢神宮

- 第1節 『古事記』に見る天照大御神
- 第2節 『古事記』と天照大神の伊勢
- 第3節 古代天皇制と伊勢神宮

第2部 宣長の時代背景と生涯

第4章 蒲生氏郷と松坂

- 第1節 松ヶ島から松坂へ
- 第2節 松坂の建設
- 第3節 町中掟之事—松坂の都市運営—

第5章 本居宣長の時代背景と生涯

- 第1節 本居宣長の文化的社会的背景
 - 第1項 江戸時代の学問
 - 第2項 江戸の町人文化
- 第2節 宣長の生い立ち
 - 第1項 豪商の家に生まれて
 - 第2項 少年時代の教養教育と作品
 - 第3項 京都遊学時代
- 第3節 国学者としての宣長
 - 第1項 松坂の一夜 —賀茂真淵との出会い—
 - 第2項 歌会の門人
- 第4節 医者（小児医）としての宣長
 - 第1項 改名
 - 第2項 町医者宣長
- 第5節 宣長の趣味
 - 第1項 鈴の屋
 - 第2項 旅

第3部 宣長の政治思想

第7章 本居宣長における国学政治思想の誕生

第1節 本居宣長と「物のあはれ」

第1項 国風文化

第2項 宣長の「物のあはれ」

第3項 相良亨の「物のあはれ」論

第4項 田原嗣郎の「物のあはれ」論

第5項 両者の問題点

第2節 宣長学成立期の「物のあはれ」論

第1項 「物のあはれ」への着目

第2項 文芸論として「物のあはれ」論の成立

第3節 宣長の「物のあはれ」論の完成

第1項 宣長中期の「物のあはれ」論の問題点

第2項 一般論としての「物のあはれ」論の成立

第4節 宣長の国学政治思想の誕生

8章 やわらかな主体の誕生

第1節 人間と外部世界 —朱子学の格物窮理説の否定—

第2節 凡人（ただびと）論

第1項 凡人の定義

第2項 凡人と被治者

第3節 宣長の人間観

第1項 心情

第2項 真心

結 語

論文の構成に従って簡単な内容紹介をしたい。

本論文の第1部は、宣長の古代と称して、まずなぜ宣長が『古事記』と『日本書紀』の二つあるなかで『古事記』を選んだのかの理由を解明する作業を行った。第2章では、『古事記』と『日本書紀』がどういう時代背景から出てきたのかを明らかにする作業を行った。アジア世界が風雲急を告げるのは、お隣の中国に統一王朝である隋が建国されたことである。隋は短期間に滅びるが、隋を継承発展させた唐は、新羅と結んで朝鮮半島から日本を完全に排除した。白村江の戦いでの敗戦は、日本にとってものすごい衝撃であったと思われる。独立国としての存続の危機にさらされたと言ってもいいだろう。それは、天智天皇の時代に日本海沿岸の各地に作られた防衛施設を見れば分かる。対外的な危機が、日本を国家として意識させたとも言える。「日本」という名称が使われるようになったのも、この時代である。唐帝国の属国になることなく独立国であり続けるためには、まさに急激な国家体制の整備が必要であった。

中国からの儒教や仏教、そして様々な文物や政治制度や法を取り入れることで、強大な中央集権国家を作るというのは、この時代の日本にとって急務であったとっていいであろう。それは、日本の独立のためには不可避のものであった。聖徳太子、中大兄皇子（天智天皇）、そして天武天皇と続く時代は、日本の国家的な、対

外的な危機の時代であった。その危機意識を多くの日本人が共有していたことが、ある意味強引な中央集権国家の形成が、それほど大きな反対や抵抗を受けることなく成功を収めることができた理由ではないだろうか。

古代天皇制国家を形成するには、伝統的な神道ではなくて、普遍性をもった儒教や仏教が必要とされた。儒教と仏教は、まさに文明であった。遣隋使や遣唐使によって中国文明を貪欲に摂取して、国家統一を成し遂げ国家秩序を必死に整えることで、古代日本は、中国の属国となることなく独立を維持できたのである。

対外的危機を背景に聖徳太子から始まった日本の古代国家建設の歩みは、壬申の乱の政権を握った天武天皇の統治で一応の完成をみた。それゆえに、天皇家の正当性あるいは正統性を担保するためには、天孫降臨の神話と神道が必要とされたのであろう。これが、第3章で分析していることである。出雲神話を採取している『古事記』は、それを提供している。宣長は、日本には中国のような「易姓革命」がないこと、「万世一系」こそが日本の特徴として挙げているが、それは、律令制の完成者とも言っている天武天皇によってその道筋がはっきりとつけられたのである。第2章で研究した『古事記』『日本書紀』編纂の背景というのは、まさに宣長の古代を見つけ出す旅であった。私が見つけたのは、日本の古代は、ここで要約したように、古代日本の「近代化」のためにまさに貪欲に中国文明を学んだ国であるということだ。それを「漢才」ということで表現している。にもかかわらず日本の心、宣長の表現を使えば「大和魂」を失わなかったのが、日本である。日本の心を保存し生かし続けるためにこそ、天武天皇は『古事記』と『日本書紀』の編纂を命じ、そして、その日本の心の故郷として伊勢神宮を建立したのではないかというのが、彼女の分析である。日本文化の特質とは何かと問われれば、「和魂漢才」あるいは「和魂洋才」だと答えるだろうと結論している。副査の藤森教授によれば和魂漢才という表現は平安時代にまで遡ることができるそうである。ここに彼女の論文の独創性の一つを見ることができると思われる。

第2部では、天才としか言いようない本居宣長が生まれた背景、時代背景、そして生涯を追いかけた。本居宣長がその生涯を過ごした松坂は、楽市楽座による経済の振興のためのまちづくりを信長に学び、それを継承した秀吉の家臣となった蒲生氏郷によって、まさに計画的な商業都市として造られたものである。城下町を商人の町として形成するために、自分の生まれの近江から商人を計画的に移住させ、町を栄えさせた。都市の道路を整備するだけでなく参宮街道を引き込み、また川に橋を渡して交通の便をはかるなどの社会的なインフラの整備も精力的に行った。松坂は伊勢神宮に参拝する人たちにとって宿場町としても発展した。豊臣政権下で、そして、江戸時代を通じて発展し、ついには伊勢第一の商業都市になったのである。日本三大商人の一つ伊勢商人の代表的な存在がここ松坂の商人たちなのである。その松坂について分析紹介しているのが、第4章である。

次の第5章に本居宣長の文化的社会的背景を書いた。京都の遊学は5年半ぐらいであったが、宣長にとっては大変大事な時期である。そもそも上京の目的は医学を学ぶためであったのだが、京都では、掘景山、契沖、武川幸順などとの出会いのほかに、様々な経験をしている。宣長が京都に遊学に行った時、元禄時代が終焉してからすでに48年間たったが、京都は元禄文化の中心でもあったので、その残り香があり、宣長は京都での生活を享受したのである。元禄文化は、支配階級である武士のみならず被支配階級である商人や職人にも経済的な余裕が生まれ、購買力が高まったことによって活発になった文化である。日常的に芝居小屋に通い、浮世草子を買って求め、あるいは貸本屋に赴き、俳諧や長吟を楽しむ人びとの数が一定数に達していなければ、文化として成熟することはありえなかったであろう。

次の第6章では、宣長の生涯のことを書いている。宣長は町人で、医者である。宣長は松坂の商家の出であるが、商いに向いてなく、読書ばかりやっていた。宣長の母が、宣長が経済的に自立していけるように、医学を学ばせるために京都へ赴かせた。若いときからまじめで、読書が好きな宣長も様々なノート、日記、和歌などを書いている。早熟な天才ぶりが印象的である。

第3部には宣長の政治思想に関して書いている。第7章では、本居宣長の有名な「物のあわれ」論について考察している。平安時代の国風文化の世界を紹介しながら、宣長の「物のあわれ」について迫っている。東北大学の大学院時代に著名な宣長学者と言われた相良亨と田原嗣郎の研究を先行研究としながら、「物のあわれ」が意味する世界に肉薄しようとした。最後の第8章に「やわらかな主体の誕生」と題したのは、宣長の国学が、その分析対象が平安時代の女流文学であったことも相俟って、江戸の武家社会の雄々しくも猛々しい人格類型とは違う、ある意味女性的でやさしくやわらかくな主体が生み出されている、そして、それこそが日本人の原型だと述べていると解釈したことからである。

国学は、江戸時代にはあまり重視される思想ではなかった。しかし、幕末期になると大きな役割を果たす。それは、尊王攘夷運動の思想的核となつたのである。本居宣長以来の国学は、江戸時代の伏流水として流れ続けていた。幕末になり、開国か鎖国か、そして伝統保守か近代化かという中で日本がもがき苦しんでいるときに、まさに日本文化の伏流水であった国学が表の流れとして流れでて、支配的な儒教の論理を突き崩すエネルギー源となった。草莽の国学である。江戸幕藩体制のイデオロギーは朱子学であり、その論理は強固なものであったので、もしもこの宣長以来続く国学思想が日本文化の伏流水として流れていなければ、他のアジア諸国がそうだったように、近代化への離陸に失敗し、諸列強の植民地化の危機さえあつたのではないだろうか。

幕末明治維新の激動の中、諸列強による植民地化の危機をも乗り越えるのに大きな役割を、この国学思想が果たしたのではないかということである。明治日本が、近代化を推し進めるのに、他のアジア諸国と比べて容易に西洋の学問を受容できたのは、まさに、この国学思想が、江戸幕藩体制を支えていたイデオロギーである儒学と相戦い、そして、その後の国学の衰退が象徴しているように、儒学と国学が刺し違えたことであつたからではないかということである。洋学は、儒学と国学が刺し違えた、それゆえ、焼き払われた畑（焼き畑）に繁栄したのではないか。もちろんこれは、インドネシアの留学生から見た大胆な仮説にすぎないが、そういう立場からみるならば、日本の近代化における洋学の受け入れにあたって、本居宣長の国学の果たした役割は小さくなつたのではないだろうかというのが、国学思想が日本史で果たした意義についての彼女の結論である。

彼女の博士論文の構成が示しているように、彼女の論文の眼目は、本居宣長の生涯と思想の研究ではない。確かに第二部では、本居宣長が生まれた時代背景、その環境としての松阪という町、そしてその生涯を追いかけているし、また、第3部では、本居宣長の思想が政治思想にまで発展するさまを描いているが、彼女の眼目はそこにはなくて、序論で言及しているように、本居宣長というフィルターを通して、日本の政治文化の特質、対外的な危機を積極的に諸外国の文物を取り入れることによって乗り切る日本人の知恵、にもかかわらず日本人が日本人としての、あるいは日本文化が日本文化たりえたことの秘密は何かと解き明かすことに傾注されている。

最後に副査の先生の所見の一部を紹介すると、藤本先生は、「本居宣長の国学の神髄が把握されており、それが明治維新後の日本社会に多大に貢献を下という点は見るとも良いと判断する。結論として、イルマ氏は、日本文化研究の出発視点に十分に到達したものと評しても良いと判断する。つまり、研究者としての学位論文として認めても良いと考える次第である」と述べられている。また、文学研究科の藤森先生は、「難解な日本古典に向き合い、著者自身の見解に充分とは言えないまでも至っている点は評価すべきであろう。博士論文として容認すると共に日本研究のスタートに立ったことは、祝福したい」と述べられているように、審査委員会は、問題点は残されているものの、彼女の論文は、博士論文の学位を授与するレベルに達していると判断した。